

通級指導における小学校低学年児童のコミュニケーションや セルフコントロールを育むために効果的な指導

三条市立嵐南小学校
渡辺 靖子 (25年度)

当校の通級指導教室に入級している児童の中には、適切なコミュニケーションや集団行動におけるセルフコントロールに困難さがあることが多い。特にこうした低学年の児童の中には、学級内でトラブルや失敗経験を重ねてしまい、自信の低下や気持ちの不安定さとなってしまうこともある。そこで、低学年の児童に対して、「コミュニケーション」や「セルフコントロール」の力を育む効果的な指導内容や方法について追究したいと考えた。

本実践では、小学1年生の抽出児童A（以下、Aとする）を含む小集団を対象に①実態把握、②目的の明確化、③学びの価値付けを手立てとして、自己紹介やインタビューの動画作りをする指導を行った。指導を通して、コミュニケーションにおける「感情表出」等の評価スケールが上昇したこと、映像による行動の振り返りや支援ツール等によりAの場に応じた行動が増えたことから、一定の指導の有効性を確認した。

1 発表題目について

(1) 主題設定の理由

当校の通級指導教室「ドリーム」では、自校生と他校生（市内他校）を含めて、1～6年生の児童約25名に指導を行なっている。児童個々の目標や実態等に応じて、週2回から月1回の頻度で個別や小集団で指導している。これまで、コミュニケーションや集団行動に困難さをもつ児童に対し、個別に振り返りや適切な行動の指導を行ってきたが、学級の中で自信をもって行動できることが少なかった。本実践では、発達障害通級指導教室の小学校低学年児童に対するグループ指導を通して、相手との適切なコミュニケーションや集団行動におけるセルフコントロールの力を育むための効果的な指導方法について明らかにしたい。

※本実践における「コミュニケーション」「セルフコントロール」のとらえ（学習指導要領より抜粋）

	内容	自立活動の項目
コミュニケーション	場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションを展開できるようにすること	コミュニケーション (5)状況に応じたコミュニケーションに関すること
セルフコントロール	自分の得意なことや不得意なこと、自分の行動の特徴などを理解し、集団の中で状況に応じた行動ができるようになること	人間関係の形成 (3)自己の理解と行動の調整に関すること

(2) 抽出児童Aについて

Aは、工作や書字、計算が得意で正確に取り組むことができる。一方、困った場面では、伝え方が分からず、語彙が少ないことから不適切な行動になってしまうことがある。また、取り組むことが不明確だと注意が逸れやすく、荷物の準備や集団活動に間に合わない姿が見られる。Aは、1年生1学期途中から当教室に入級し、個別指導を行ってきた。グループ指導は、試行期間を経て2学期から開始した。前題材「一緒に遊ぼう」では、グループの児童B（以下、Bとする。）と役割を分担して準備や片付けをしながら、一緒に活動することが増えてきた。Aは、手順表を見ながら役割に取り組んだり、教師に「○○してもいい？」などと伝えたりする姿が少しずつ見られるようになった。

(3) 内容

- ①グループ指導（1年生2名。Aを含む）を行い、相手とのコミュニケーションや集団行動におけるセルフコントロールの力を育むための支援の手立てを整理し、効果的な方法を検討する。
- ②指導の事前・途中・事後について、コミュニケーション内容表（福岡市教育センター 特別支援教育研究室、2013）や行動観察から指導の効果を検証する。

2 指導内容

(1) 題材名 「動画クリエイターになろう」

(2) 学習計画 (指導時期 20XX 年 1 1 月～3 月)

次	主な学習活動
1 (3 時間)	「自己紹介動画を作ろう」 ○自己紹介文を作成する。 ○動画を撮り合う。動画を見合いながら、良かった点や改善点を振り返る。
2 (7 時間)	「インタビュー動画を作ろう」 ○インタビューしたい人や内容を決め、せりふや役割を練習する。 ○インタビューをする。動画を見て振り返ったり改善点を考えたりする。
3 (1 時間)	「動画作りを振り返ろう」 ○撮影してきた動画を見て、自分の頑張りや成長を振り返る。 ○インタビュー相手にお礼状を作り、手渡す。

(3) 目指す姿と指導の手立て

本題材は、「撮影の係を分担することで活動の役割が明確になること」「校内の様々な人と関わる中で、言葉遣いや場面に応じた行動など、適切な関わり方を学べること」「撮影した動画を視聴することで自分の言動を客観的に振り返り、自ら考えて行動すること」ができる良さがあると考え、設定した。本実践では、相手と考えを伝え合いながら、進んで場に応じた行動をしようとする姿を目指した。友達と一緒に活動に取り組むことを通して、コミュニケーションとセルフコントロールの力を高められるよう、「①実態把握」「②目的の明確化」「③学びの価値付け」を指導における手立てとした。

① 実態把握	児童の実態を自立活動の内容の6区分に分類して整理する。その際、家庭からのアンケートや学級担任から得意なことや苦手なことを含めて丁寧に情報収集する。
②目的の明確化	自ら進んで自信をもって取り組めるように、手順や目的、役割を確認する場面を設ける。また、表にするなどして掲示し、必要に応じて確認するよう促す。
③学びの価値付け	活動の序盤と終盤に教師と個別で目標を確認する場面を設ける。活動中には、目標に沿った言葉掛けを行う。活動の範囲をスモールステップで広げ、様々な人に称賛される場面を設定する。

3 指導の経過とAの様子 ※ () は指導の手立て

(1) 指導開始前 (①実態把握)

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
・体にかゆみを感じやすい。	・分からない活動や苦手な活動になると、離席してくるくる回ってしまう。	・悪気なく、相手が嫌がることを言ったりしたりしてしまう。 ・周囲が気になり、集団の活動から遅れてしまう。	・字を整えて書くことは得意。細かい部分を捉えることは得意。 ・靴が苦手で脱いでしまう。 ・肌着シャツが出ていることが多い。 ・計算問題や黙々と取り組む活動が得意。	・はさみや工作などの細かい作業が得意。 ・座位で姿勢を保つことが難しいなど、粗大運動に苦手さがある。	・表出する語彙が少なく、言葉で伝えるまで時間がかかる。

上記の実態より、本題材におけるAの指導目標は次のとおりとした。

項目	指導目標
コミュニケーション	困ったときや手伝ってほしいときの適切な伝え方が分かり、自分から伝えることができる。
セルフコントロール	言葉掛けや支援ツールを手掛かりに、相手や場に応じた行動をしようすることができる。

(2) 第1次「自己紹介動画を作ろう」

「やりたい」と取り組むことに見通しをもち、進んで取り組む姿 (②目的の明確化)

1 時間目は、タブレット端末を活用した自己紹介動画づくりについて説明した。撮影の仕方を教師がモデルを示したり、試す場面を設定したりしたことで、Aは本活動に関心をもった。動画撮影は、「監督」「出演者」「カメラ」の3つの役割を設定し、AとBと教師とで順番に交替して取り組むようにした。するとAは、児童らが相談して決めた分担表を確認しながら、進んで役割を果たすことができた。また、「次はBさんの番だ」と伝えたり、タブレット端末の操作をBに自分から教えたりする姿が見られた。

「こうすればいいんだな」と自分の行動を意識して取り組む姿 (③学びの価値付け)

授業の序盤では、2人で頑張る目標を教師が提示し、その後教師と個別で具体的な行動目標を設定した。「手伝ってと言う」「相手を見る」などの目標となる行動を確認することで、Aから目標とする言葉や行動が見られるようになった。

授業の中盤では、撮影した動画をすぐに見返し、良かったところや改善したほうが良いところを出し合うようにした。Aは、立ち歩いてBの撮影する動画に写ったことに気付いたため、教師と一緒に対策を考えたところ、自らカメラ係の横で待機することができるようになった。また、話し終わった後に姿勢が崩れてしまうことに気付いて「首・・・(が曲がっている)」と話し、良い姿勢を確認して取り組むことができた。また、撮影した動画を見て、Bが顔に原稿用紙が掛かっていることを自分から伝える姿もあった。

授業終盤の振り返りでは、序盤に立てた目標を基に動画を観ながら自己評価する場面や教師が評価する場面を設定した。動画を一緒に確認しながら「まっすぐ立てるようになったね」など、具体的な行動を称賛されると笑顔が見られた。第1次最後の授業では、最初に撮影した動画と比較して、児童は互いに「姿勢が良くなったね」などと伝え合い、成長を称賛し合った。そして、Aが撮影した動画を「〇〇先生(担任)に見せたい」と話したため、在籍学級の担任に見てもらう機会を設定した。「最後までまっすぐ立っていてかっこいいね」などと称賛されると、笑顔で喜ぶ姿があった。

(3) 第2次「インタビュー動画を作ろう」

「今は〇〇しよう」と相手や状況に合わせて行動しようとする姿 (②目的の明確化)

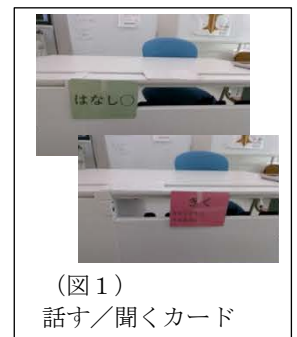
意欲的に活動する一方、話を聞く場面でも話続けてしまう姿が見られるようになった。そのため、話す場面と聞く場面を視覚的に分かりやすくするため、「話す／聞くカード」(図1)を用意した。活動中、自分の話を始めたときに教師がカードを指差すと、自分から「違った」と言い、話すことをやめて目の前のことに集中する姿が見られた。

第2次では、関わる人の範囲を顔見知りの級外職員に広げ、インタビューを行うことにした。相手を決める際には、職員写真を見ながら話し合いを行った。自分が親しみのある先生を挙げたBに対して、Aは「その先生は〇組では音楽やってないから」とA、B共通で親しみのある先生を選ぼうと発言する姿が見られた。インタビューでは、慣れない相手に緊張しながらも、言葉遣いや挨拶、立つ姿勢を意識した様子で取り組んだ。終了後、「緊張して疲れた」と話しながらも、インタビューした相手に褒められたことを振り返ることができた。通級の授業後、自教室に戻る際に教師のところに来て、「今日は姿勢頑張った」と自信満々に伝える姿があった。

「褒められて嬉しい」と自分の行動に自信をもつ姿 (③学びの価値付け)

インタビュー時の良い姿を具体的に分かるように、「いいねの木」(図2)を掲示した。インタビュー時の気を付けるポイントを「こえ(声の大きさ)」「しせい」「マナー」の3つに整理し、それぞれのポイントに当てはまる色のカードに書き込んで称賛した。良い姿は「いいねの実」として木のポスターに貼り、蓄積することで、Aは少しずつポイントを意識するようになった。Aは、Bから「首(姿勢)が良くなった」と褒められ、「いいねの実」を受け取ったとき、とても嬉しそうにしていた。

級外職員へのインタビューの際には、事前に称賛してほしいポイントを授業者から伝え、Aの「相手の方を見る」という目標に沿った言葉掛けをしてもらうようにした。Aは、校長先生からBが褒められる姿を見て、自分も目標を意識して姿勢や視線を整えようとする姿が見られた。養護教諭のときは、視線だけではなく、さらに体を相手に向けてインタビューすることができるようになった。



(図1) 話す／聞くカード



(図2) いいねの木

(4) 第3次「動画作りを振り返ろう」

「先生たちに渡したい」と進んで取り組む姿 (②目的の明確化)

これまでの活動を動画で振り返り、インタビューした相手に礼状を書く活動を行った。Aは、それぞれの先生から褒めてもらったことを覚えていて礼状書きには意欲的に取り組んだ。Aは、礼状を書く中で「先生、(どうかいたらいいか) 分からない」と自分から教師に相談したり、授業時間内に書き終わらないことを教師に「まだ終わらない」と伝えたりするなど、指導を行う前に比べ、自分の気持ちや状況等を言葉で教師に伝えることができた。

「かっこよくなって嬉しい」と活動を振り返る姿 (③学びの価値付け)

これまで制作した動画を振り返る活動を行った。自己紹介動画とインタビュー動画を比較しながら気を付けたところを教師が問い掛けると、「(あの時は) 首が・・・(曲がっている)」と自分の行動が良くなっている変化に気付いていた。Aが客観的に自分の行動を振り返ることで、適切な行動をしようとする意識を高めることができた。

4 本題材における A の評価

(1) コミュニケーション

「コミュニケーション内容表 (福岡市教育センター 特別支援教育研究室、2013)」の評価では、6つの項目のうち、「あいさつ」「感情表出」「発信行動」「拒否・要求行動」「受容行動」の5つの項目で数値が上昇した。特に相手に「〇〇してもいい」と尋ねたり、相手の働き掛けに対して「うん」「そうだね」と返事をしたりすることが増え、自分の気持ちを表現する力がついた。

(2) セルフコントロール

本指導を進める中で、徐々に全体の前に立つ場面で適切な姿勢を最後まで保持しようとする姿が見られるようになった。また、指導当初は、授業中に一方的に話したり、話が止まらなかつたりする姿が見られていたが、「話す／聞くカード」を確認することで話し続けてしまうことに気を付ける姿が見られるようになった。

5 指導のまとめと今後の課題

上述した指導の経過や評価より、Aの目指す姿に迫るための3つの手立て(①実態把握、②目的の明確化、③学びの価値付け)は有効であったと考える。Aは、指導を通して、Bや教師に気持ちや考えを伝えたり、適切な行動をしようとしたりすることが増え、集団の活動への自信を高めてきている。学級担任からは、感想文が以前よりも書けるようになり、表現も豊かになった。また、言葉で気持ちや考えを伝える場面が増えてきたと聞く。

今後は、コミュニケーションとセルフコントロールの力を高めるための通級でできるグループ指導の方法をさらに追求するとともに、通級指導教室で育んだ力を在籍学級で発揮するための教師間の連携についても追求していきたい。

参考文献

- 1) 森和裕・安藤末廣 2009
アスペルガー障がいのある自動のコミュニケーション能力を高める対話スキル指導法の研究—ソーシャルスキルパッケージ指導の検討—
宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 第21号 (2009)
- 2) 山岸透・赤坂真二 2021
中学校における学級内の認め合い活動が自己有用感の育成に及ぼす影響に関する事例研究
上越教育大学教職大学院研究紀要 第8巻 令和3年2月
- 3) 中島俊思・柳智盛・一ノ瀬有紗・遠矢浩一・針塚進 2009
大人相互交渉に消極的な小学校高学年発達障害児へのグループセラピー 九州大学総合臨床心理センター紀要 2009 第1号
- 4) 石塚祐香・石川菜津美・山本淳一・野呂文行 2021
自閉症・情緒障害特別支援学級の自立活動におけるビデオモニタリングを用いたソーシャルスキル指導の効果と社会的妥当性の検討
障害科学研究
- 5) 新潟県教育委員会義務教育課
通級指導教室運営上の課題への対応～指導・運営について～ 平成30年4月
- 6) 福岡市教育センター 特別支援教育研究室
特別支援教育におけるコミュニケーション力の育成一個の実態を活かした目標設定と環境づくりの工夫を通して—
平成25年度研究紀要第917号
- 7) 文部科学省
特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚園部・小学部・中学部) 平成30年3月
- 8) 清野健男 (新潟県立はまなす特別支援学校)
高等部職業生活における陶芸作業の実践 ～目的に向かって主体的に作業に取り組む姿を目指して～ 令和5年度本部発表